

## 足の速いアキレウス

——ホメーロスの人物の epithet に関する一考察——

山形直子

### 序

本稿をその第一章(原題:人名につく epithet の機能について)とする五十七年度筑波大学文芸・言語研究科提出の修士論文『イーリオスの歌』がすでに提出されるばかりになっていたとき、最新の図書として筆者の手に届いたのが Paolo Vivante, *The Epithets in Homer: A Study in Poetic Values* (Yale University Press, 1982) であった。このようなわけで本稿はこの著作からの直接の影響は受けていないが、読者は一見して両者の出発点がほとんど同じ認識の上に置かれていることに気づかれるはずである。

すなわち、ホメーロスの詩においてある名詞に epithet が添えられるか否かには、韻律の都合以上の何らかの理由があること、より具体的には、epithet を付すということは、そこに聴衆(あるいは読者)の注意を一瞬ひきつけておく効果がある、ということである。そこからの論の展開は、筆者が「人物像」に注目し、Vivante が人物の「動作」などにやや比重を置いている点で異っているが、さまざまな epithet の用法の分析それ自体においては Vivante の方がはるかに網羅的・体系的であって、本稿の論点の少なからぬ部分が Vivante の著書のどこかで(特に第 12 章、Persons, pp.86-93)より精密に述べつくされてしまっていることを告白しなければならない。

ただし本稿は Parry 説の存在を無視し得ない現状でそうした分析を行なうための立場の確保という点に特に力を注いだものであるのに対して、Vivante の書はその作業を全く省いているように思われ、また筆者独自の観察にもいくつか見るべきものがあるかもしれないと考えて、あえてほぼ原形のままここに収めることにしたものである。

### 1. epithet の選択

Milman Parry は、六脚韻詩における伝統的な epithet が “unique

metrical value”をもつこと、すなわち、一行の一定の位置に来る epithet は一個の名詞について原則として一個しかないことを主張した<sup>(1)</sup>。つまり、詩人は一行のある位置に noun-epithet formula を作る場合、どの epithet を選ぶか迷う必要がなく、韻律が自動的に、あらかじめ用意されたただ一つの epithet を要求するのだという。確かにこのようなシステムがあれば、半ば即興的に吟唱しなければならない詩人にとってはきわめて有効な道具となるに違いない。しかし、詩人が epithet を、その置かれる位置のみによって選択したとすれば、それは同時に、意味によって選択する自由がなかったということの意味する。現に Parry も、formula を形成する fixed epithet の選択は全く韻律上の動機によるもので、文脈とも、その語の意味とも関係がない、と明言している。そしてこれが、文脈とかみ合わない、いわゆる epithet の “illogical usages” の原因であるとする。またさらに、こうした formula に用いられる epithet はもはや、詩人にとっても聴衆にとっても、単なる決まり文句の一部として定着してしまっているために、それ独自の意味が感じられなくなっていたのだらうと推論している<sup>(2)</sup>。

この Parry の説がだいたいにおいて『イーリアス』、『オデュッセイア』の noun-epithet formulae のシステムをよく説明し得るものであることは、認めないわけにはいかないであろう。ただ、Parry 自身も認め、他からも指摘されているように、現存テキストに見られるかぎりのシステムはいかにしても不完全なものである<sup>(3)</sup>。Parry の取り上げた 18 の人物名の主格形についてさえ、理論的に考えられる noun-epithet の組の半分以下しか実際にはテキストで使われてはおらず、その内には一回だけしか使われないものも少なくないことから、この説を疑問視する向きもある<sup>(4)</sup>。本来 formula を形成するのではない、特殊な用法の epithet についてはもちろん Parry 説は適用できないから、“fixed epithet” という分類の幅をどの程度広く取るかで妥当性に幾分違いが出て来るのは当然である。ただテキストの少ないことが Parry にとっても強味になっているわけで、全面的に反駁し得る根拠は今後も発見されないのではないかと思われる<sup>(5)</sup>。

だが、同じ叙事詩の伝統に根ざし、成立年代もそう隔っていないとされる二大叙事詩を比較してみると、formula に関するシステムが、言われているほどに厳格なものではなかったと思わせる例が出てくる。『イーリアス』も『オデュッセイア』も同じ伝統のストックを背景にしているはずだが、両者に共通に登場する人物について調べると、必ずしも同じ epithet が同じ頻度で使

われているわけではないようである。

たとえば『イーリアス』ではまさにアキレウスに付き物といった観のある「足の速い」という意味をもつ epithet は、後に見るように何種類もあり、『イーリアス』で総計 60 回以上も使われているのだが、『オデュッセイア』では、全く、一回も、使われていない。従って、

Tòn d' apameibómenos prosépē pódas òkÿs Achilleús

という、『イーリアス』ではアキレウスの返答の際必ずといってよいほど用いられた表現も姿を消し、

Hōs ephámēn, ho dé m' autík' ameibómenos proséeipe

(Od. XI 487) など、全く別の形の formula にとってかわられている。これは、すでに死んで魂だけになったアキレウスに「足の速い」という epithet を用いることを詩人が不適切と考えたためと思われる。

同様に、『オデュッセイア』で 11 回使われているオデュッセウスの属格形の epithet “talasíphronos” (堅忍不拔の) も、『イーリアス』では XI 466 に 1 回使われるのみである。艱難辛苦に耐えるオデュッセウスの図は、いかにも『オデュッセイア』にふさわしく、『イーリアス』では参謀・知将としての役割の方が大きいせいであろうか。ただ上記の XI 466 のみは例外で、ここではまさにたった一人で敵に囲まれて奮戦しているオデュッセウスが描かれている。

もっとも上記の 2 例は、数量的に言って問題があるかもしれない。『イーリアス』におけるアキレウスの名、『オデュッセイア』におけるオデュッセウスの名は、それぞれ他方の叙事詩におけるよりも圧倒的に多く現れてくるから、名前が出る回数が多い方であって少ない方ない epithet があるのは当然という反論もできるかもしれない。しかし、これに対しては、“douriklytós”(槍で名高い) という epithet を例として掲げることができよう。『イーリアス』では 19 回、アカイア方の武人のみに使用され、そのうち 4 回がオデュッセウスへの用例である。ところが『オデュッセイア』ではこの語の用例はたった 2 回しかなく、しかもオデュッセウスへの使用は皆無である。オデュッセウスを弓の名手として描くこの叙事詩自体の雰囲気にそぐわない epithet と見なされたのかもしれない。

オデュッセウスの名に関しては、この語は、

\_\_ υ υ \_\_ Odyseüs douriklytós \_\_ υ υ \_\_ υ

の形で使われる。行頭に別の epithet が来る箇所を除くと、\_\_ υ υ \_\_ Odyseüs

ではじまる行が『オデュッセイア』には15もあるが、そのうちの1回も *douriklytós* は使われていない。詩人はこの *epithet* の使用を、オデュッセウスに関しては全く認めなかったのである。

そのかわり、15例のうち2例にはこれと同じ機能の “*Ithakésios*” (イタケーの) という *epithet* を用いている。こちらの方がおそらくオデュッセウスにとって本来的な *epithet* だったと思われる。『イーリアス』の詩人もこの語をオデュッセウスの伝令使に用いていながら (II 184) オデュッセウス自身には使うことなく、かわりに *douriklytós* を『イーリアス』の英雄によりふさわしい *epithet* として使用可能な箇所すべてに用いたのである。ここに我々は、それぞれの叙事詩にふさわしいオデュッセウス像を描こうとした詩人の選択のあとを見なければなるまい。

こうして見ると我々はもはや、そこに *epithet* が置かれている、という事実を、単に韻律の要求だけから説明することはできなくなってくる。仮に伝統の用意した統一的な *formula* のシステムがあったとしても、それは個々の詩人が自分の当面の目的に合ったものを利用し、合わないものは斥けることができるだけの柔軟性を持ったものであったと考えなければならない。少なくとも詩人は、不適切と考える *epithet* を他のものと取り換えたり、全くなしてすませたりするだけの技術は持っていたのである。

これを逆に言えば、詩人がある箇所にある *epithet* を用いたということは、少なくともそれを不適切とは考えなかった、ということであり、その *epithet* の持つ韻律的以外の効果の利用をも詩人自身が決断した結果と考えなければならない。従って、*epithet* の意味の問題も選択の基準の一つとして改めて問い直す必要がある。

では我々は、*fixed epithet* について、あるいはそれ以外の種々の *epithet* について、どの程度までその「意味」を読み取るべきか。この問題にはいる前に、人物名につく *epithet* が本来どのような機能をもっているかをまず考えてみよう。

その第一の機能は、ある人物の属性・身分・出自等をあらわすことである。この点は述語的に用いられる形容詞・名詞とも同じである。

もう一つの機能は、ある人物をその性質や出自等を添えて示すことによって他の人物から区別し、個的な存在として際立たせることである。これは『イーリアス』における二人のアイアースの区別において特に顕著に看取されよう。テラモーンの子アイアースについては、出てくる回数が圧倒的に多い

(139回)こともあって epithet のつかない例が半分を占めるが、オイレウスの子アイアースの方は名前の 19 回の用例のうち 14 回まで epithet を持ち、そのうち 12 回までがこのアイアースに特有の “Oĩlêos tachýs (hyiós)” “Oĩliádēs” “tachýs” の三種類からなっている。オイレウスの子が登場する場面では必ず最初の方でこれらを使ってそのアイデンティティーを明らかにしているのである。

この第二の機能は、同一の epithet が複数の人物に使用されるとき、そうした人物の一体性や類似性を暗示するものともなり得る。その他にもいろいろな機能に分類できようが、基本的には上記の二つが出发点と考えてよいだろう。すなわち、属性の叙述とアイデンティティーの明確化である。それでは、こうした意味上の機能が、韻律調整上の機能との兼ね合いでどの程度までホメーロスの epithet 使用のシステムの中に生きているか、これを先にも挙げた「足の速いアキレウス」という表現を例にとって考察してみよう。

## II. 足の速いアキレウス

「足の速いアキレウス」という表現で、確かに noun-epithet formula と認められるものとしては二つある。すなわち、

pódas ōkÿs Achilleús (足の・速い・アキレウス)

podárkēs díos Achilleús (足の速い・神の如き・アキレウス)

の二つで、それぞれ第四脚の第二音節 (hepthemimeral caesura のあと) および、第三脚の第三音節 (trochaic caesura のあと) から行末までの位置を占めるものである。『イーリアス』の中で前者は 29 回、後者は 21 回使われている。ところがこの二つのおなじみの formulae は、アキレウスの「足の速さ」がまさに発揮されようという場面では奇妙なことに全く使われないのである<sup>(6)</sup>。

仮りに今、前者を(1)、後者を(2)としよう。(1)のタイプの用法を調べてみると、そのうち 25 回までが、

Tēn d' apameibómenos proséphē pódas ōkÿs Achilleús (II. I 215) など、アキレウスが語る言葉の直接話法を導く前置きの文に用いられており、これが最も一般的な用法と言えそうである。それ以外の箇所は、

- 1) II. I 489 dīōgenēs Pēlêos hyiós, pódas ōkÿs Achilleús. これは、一行全体がアキレウスを表わすのに用いられている。アカイア人のアポロンへの供儀から、57 行ぶりにアキレウスに話が戻ったところで使

われている。

- 2) II. XI 112 アガメムノーンが殺す二人のトロイアの王子をかつてアキレウスが捕えた、という文中にある。
- 3) II. XXIII 776 (オイレウスの子) アイアースをつまづかせた牛の臍物の由来を述べる箇所。アキレウスがバトロクロスのために牛を屠った、という文中。
- 4) II. XXIV 751 ヘカペーの嘆きの中で、これまでに彼女の多くの子供をアキレウスが捕えてきた、という文。

以上で明らかなように、発言を導く前置きに用いられた 25 例はもとより、他の 4 例も、アキレウスの「足の速さ」には関係のない箇所である。もっとも、2)、4)の例は、アキレウスの足の速さに代表される武勇を表わす場面であるから、間接的意味を持ち得るのかもしれないが、いずれにせよ「足の速さ」そのものには関係ない。

さて、21 回用いられている(2)のタイプの用法はというと、このうち発言を導く文に用いられているのが

Tēn d' ēmeībet' ēpeita podárkēs dīos Achilleús (II. XVIII 181) など 10 箇所、この用例がやはり多い。その他の箇所では、

- 1) II. II 688 船団のカタログでアキレウスの不参加の理由を述べる箇所。アキレウス自身は「ふせている」のでリアルな意味では epithet と矛盾する。
- 2) II. VI 423 アンドロマケーの話の中で、アキレウスが彼女の身内を殺したと言っている。これも(1)の 2)、4)のように、直接的な意味は生きていない。
- 3) II. XI 599 負傷したマカーオーンに目をとめる。(1)の 1)と同様、アキレウスが久々に登場する箇所で、しかもアキレウス戦場復帰の発端になる場面である。
- 4) II. XX 413 「足の速さ」を誇るポリュドーロスの背へ槍を打ち当てて殺す。倒す相手との対比で、アキレウスの「足の速さ」がここでは生きてくる。
- 5) II. XX 445 アポローンの計らいで霧の中に隠れたヘクトールを槍で突こうとする場面。一応追撃の場面であるから「足の速さ」を生かしてイメージした方がいいかもしれないが、やや間接的になる。
- 6) II. XXI 49 リュカーオーンを見つけて殺す。上記 2)と同じ事情であ

ろう。

- 7) II. XXI 265 スカマンドロス河に追われて走っていたが踏みとどまる。足の速さが言われてもよい箇所である。
- 8) II. XXIII 140 ふと思いついて髪を切り取る。パトロクロスの葬儀の際のことで、全く意味には関係ない。
- 9) II. XXIII 193 ふと思いついて二つの風に祈りを捧げる。上記8)と同じ事情。
- 10) II. XXIII 333 ネストールがアンティロコスに語る文中。意味には関係ない。
- 11) II. XXIII 828 エーエティオーンを殺して鉄塊を奪った、というエピソード。上記2)、6)と同じ事情であらう。

すなわち、アキレウスの足の速さそのものに積極的に関係があると見てよいのは、わずかに4)、7)ぐらいのもので、2)、5)、6)、11)などはアキレウスの武勇から間接的にイメージできるという程度である。

従って、(1)(2)の両者とも、「足の速い」という epithet の属性を表わす機能はほとんど残っていないと考えられる。だが、第二のアイデンティティーの明確化という機能は失われていないようである。

たとえば、(2)の1)のように、英雄たちのずらり並んだリストの中では、彼の個性を明らかにする「足の速いアキレウス」という言い方は、生きた効果を持っていると言えよう。ここではアキレウスのみならず他の武将の名でも epithet のつくものが少なくない。各人の個性を明らかにして互いに区別をつけやすくする必要からだと考えられる。また、(1)の1)や(2)の3)のように、徐々にアキレウスに話が戻って来たところで聴衆の注意を彼に向けるのにも同様の効果が利用されているといえよう。

ところで、このことは(1)の25例、(2)の10例を占める発言を導く文についても言えないだろうか。アキレウスに限らず、ホメーロスの叙事詩に登場する主要な人物はみな、同種の発言を導く formula を持っているが、それは聴衆の注意をひくための常套手段として叙事詩の伝統の中に根を下ろしたものではなかったかと推測される。すなわち、目で読む書物と違い、耳で聴く吟唱において、特に直接話法が長く続く場合（これはホメーロスには非常に多い）、作中の話者が誰であるかを聞きのがすと話の脈絡が不明瞭になるおそれがあったのではないかと思われる。そこで、よく登場する人物には一行や半行の定型表現を用意して、その人物をはっきりと提示する工夫がなされ

ただと考えれば、あえて“illogical”な epithet を発言の際に必ずといってよいほど用いるようになった理由も説明されるように思う。物理的にも、epithet をつけて長くした方が聞きのがす危険は小さくなるはずである<sup>(7)</sup>。

ところで、「足の速いアキレウス」という表現は他にまだ6通りもある。(1)、(2)の上記以外の例の考察はひとまずおいて、他のタイプのものを見てみよう。

- |        |                            |       |
|--------|----------------------------|-------|
| (3) a. | podōkēs __ ∪ Achilleús     | 1 (回) |
|        | b. podōkeos __ Achilēos    | 1     |
| (4) a. | Achilēa pōdas tachÿn       | 3     |
|        | b. tachÿn __ Achilēa       | 1     |
|        | c. pōdas tachÿn __ Achilēa | 1     |
| (5)    | ōkÿs Achilleús             | 5     |

(3) a と分類したものは II. XVIII 234 にある。パトロクロスの亡骸を運んでいくところで、アキレウスは他の仲間たちと共に泣きながら歩いている。しかし、多くの者の中でアキレウスを目立たせる効果をあげている。

(3) b は II. XX 89 にあり、アイネイアースの語る敵としてのアキレウスを表現しているが、その直後では彼の槍の使い手としての恐ろしさが述べられている。

従って(3)も、本来の意味とは関係なく使われている。

- (4) a. II. XIII 348 ゼウスがアキレウスに名誉を与えようと考えている。

II. XVII 709 アンティロコスがアキレウスのところへ使いに出した、とメネラーオスが語る。

II. XVIII 358 ゼウスがヘーレーに語る文中。

- b. II. XVIII 69 テティスが来るときのアキレウス。坐っている。  
 c. II. XVIII 354 アキレウスのまわりでミュルミドーン人たちがパトロクロスを悼み嘆く。他の者の内でアキレウスを目立たせている。

いずれもアキレウスの足の速さ自体とは関係ない。

- (5) II. XIX 295 ブリーセイアの夫を討ち取る。  
 II. XXI 211 走る、殺す。  
 II. XXII 188 ヘクトールを追い立てて走る。  
 II. XXII 229 (デーイポボスの話の中で) 走る。



## II. XXIII 218 パトロクロスのために酒を注ぐ。

上記のうち3例はまさにアキレウスの「足の速さ」が問題とされるところであって、Hainsworthが formula が使われていないのを指摘した箇所 (II. XXII 188) でもあるが<sup>6)</sup>、ōkŷs の意味はかなり生きていると言える。この理由はおそらく、ōkŷs のはいる位置 (bucolic caesura のあと) には dīos を用いることが圧倒的に多いため、ōkŷs 単独の使用が少なく意味が風化しにくいことにあるのだろう。

さて、ここで(1)～(5)の全体をまとめてみると、「足が速い」という意味の生きているのは(2)の2例と(5)の3例だけで比較的になく、Parryの指摘するように意味が意識されなくなっている傾向を反映している。(5)については使用頻度の低いことと意味作用の強さとが平行しているため、なおさら Parry 説を裏書きするように思われる。

しかし、アキレウスの武勇を表現する場面での用法は多い{(1)の2)、4)、(2)の2)、5)、6)、11)、(3)のb)、(5)II. XIX 295}。こうした場面で「足の速い」を用いることは、意味上で間接的に武勇と結びつくだけでなく、伝統的アキレウス像(その武勇は誰もが知っている)を聴衆にイメージさせる役に立つであろう。従って、こうした例では、epithet の意味自体は弱まってしまっているが、人物の個性やアイデンティティーを強調するという機能は生きている。

そして先に述べたように、発言を導く文やリストの中、また他の人々と共にいるところで (II. XVIII 234,354) アキレウスのアイデンティティーを強調し聴衆の注意をひく効果を epithet はもたらしている。それ以外の例についてはどうか。これも、それぞれのコンテキストの中で子細に調べてみると、いずれもこのアイデンティティー明確化の機能を利用したものであることがわかる。それらはすべて、作中の一つのエピソードの中で初めてアキレウスの名が出るとか、話の転換した際 (II. XXIII 776, 140, 193, 218, XIII 348)、作中の視点人物の視界に初めてアキレウスがはいったとき (II. XVIII 69)、作中の話者の語りの中で初めてアキレウスの名が出るとき (II. XXIV 751, XXIII 333, XVII 709, XVIII 358) と分類できる。話の転換の際は聴衆は詩人の目を通してアキレウスに注目し、その他の場合は作中人物の目を通してアキレウスに注目するという違いはあるが、いずれの場合も、アキレウスという人物像にある強調を置こうとするときに用いられているということが出来る<sup>6)</sup>。

ところで、アキレウスの「足の速さ」を表わすのは、こうした epithet によ

る表現だけにとどまらない。このことは、epithet の本来の意味も忘れられていなかったことの証拠である。

II. XXI 247 posī kraipnoīsi

264 laipsērōn eōnta

564 tachéessi pódessin

XXII 8 “Típte me, Pēléos hyiē, posīn tachéessi diōkeis...”

138 Pēlēfēds d’ epōrouse posī kraipnoīsi pepoithōs

formula と共通に使われる形容詞は tachýs だけである。posīn tachéessi, tachéessi pódessin の二つはアキレウスにつく epithet の意味を具体的に言い直したものと考えることができるが、それ以外は全く新しく持って来られた表現である。共に formula が本来持っていた意味を別の言葉で蘇らせたものと言えよう。

以上の結果を総合して言えることは、epithet の意味は完全に忘れられてしまったわけではなく、詩人も聴衆も承知してはいるが、その意味とは直接関係のない別のニュアンスの表現に使用されることが多くなったために、意味の方に特に注目させたいときには特殊な使い方をしたり、あまり使わない表現や全く別の表現を持って来なくてはならなかったということである。

これは一面で Parry の指摘を追認する事実と言える。形容詞が epithet として定着した場合、その本来の意味が薄らぐことは、上記の観察からも明らかである。だが、その結果 epithet に残された役割は、韻律調整上の便利なブロックとしてのそれだけではなかった。epithet が本来 epithet として持っていたはずの、その添えられた人物を個性的な存在として際立たせ、それに注目させるという機能をも保持していたのである<sup>(9)</sup>。

### III. epithet の機能の差異について

先の項でも少し触れたように、一口に epithet といっても、ものによって多少の機能の差があることは否定できない。ここで一応その大まかな分類をしておく必要がある。

たとえば、Parry が“particularized epithet”<sup>(10)</sup>と呼ぶ一群の epithet は、伝統的な formula の中で使い古されていず、意味が生きているものである。これは意味の生きている分だけ、そのつく人物そのものよりも epithet に重点が行くことになる。たとえば II. I 122 で怒ったアキレウスの吐く言葉に、

Atreídē kŷdiste, philokteanōtate pântōn なるものがある。この原型はもちろん II. II 434 等にみられる。

Atreídē kŷdiste, áanax andrôn Agámemnon, であって、本来ならば総大将に最大の礼儀を尽くすべき表現の後半が激しい罵声に変わっているのだから聴衆もどきりとせざるを得ない。つまりここでは非難を向けられたアガ멤ヌーン自身と共に、このような言葉を吐いたアキレウスの激怒、そして両者の間にかもし出されるただならぬ雰囲気を描出されている。意味の薄らいだ formula が存在するということは他方で、そこに別のものを入れた場合の効果が倍増するという利点があるということを、この例はよく物語っている。

このような効果をあげる epithet も、これはこれでその添えられた人物を舞台の中央に引き出しているわけだが、特定の人物像を浮かび上がらせる力は、やはり伝統的な noun-epithet formula にしくはないだろう。たとえば Atreídēs, Pēleídēs などの父称や、“Phoibos”の場合に顕著なようにある人名と密着した epithet はそれだけでその人物を連想させる力を持っている。そしてアキレウスの例に見たように、人物の発言の際に用いられる epithet は、必ずその人物を個性的な存在として目立たせるこのタイプのものでなければならないという法則のようなものがあつたようにすら見うけられる。というのは、その語本来の意味が薄れているのみならず、特定の人名と結びつきそのイメージを連想させるという機能も弱い、一連の“generic epithet”と呼ばれるものもあるのである。これの使用される対象はまさに「不特定多数」と言うに近く、Parry が例に挙げている dŷos の場合など、『イーリアス』『オデュッセイア』合わせて 32 人も人物の名、しかも豚飼いのエウマイオスにまで使われている<sup>(11)</sup>。だからアキレウスに用いる場合多くは“podárkēs”を、『オデュッセイア』でオデュッセウスに用いる場合も“polŷtlas”を添える (polŷtlas dŷos Odysseús) 必要があつたと考えられる。同様に、発言の際の epithet として故意に generic なものを避けたと思われる例がある。

たとえば、パトロクロスの epithet を調べてみると、その発言の際には必ず

Tōn d' oligodranēōn proséphēs, Patrōklees hippeû (II. XVI 843) など、formulaic な書き出し (歌い出し?) + 動詞二人称 + 呼格という異例の形、すなわち詩人の呼びかけの形式をとる。詩人の呼びかけはこの表現以外の箇所にも転用されるほどだから、この formula の成立が十分早いものだったことが想像される。この表現は、たとえばここに generic な“amŷmōn” (非の打

ちどころのない) を用いることが許されれば(属格形で現に二回使われている)、

\*Tōn d' oligodranéōn proséphē, Patrōklos amýmōn とすることもできたはずだが、ここであえて呼格を用いてまで *hippeús* という epithet を残したことに、よほどの訳があったと考えねばならない。先に無造作に(?)*dīos* を奉られたエウマイオスでも事情は全く同じである。

Tōn d' apameibómenos proséphēs, Eúmaie sybōta とせずに、

\*Tōn d' apameibómenos proséphē, Eúmaios amýmōn ではなぜいけないのか。

これを説明するためには我々は結局、先に発言を導く formula の機能について下した結論を再びもってくることで十分であろう。これから発言しようとする人物に注目させるためにはその人名と密着した、その人物特有の性質をあらわす、従ってイメージの喚起力の強い修飾語を持って来なければならなかったのである<sup>(12)</sup>。

以上を逆から言い直せば、その人物の固有の epithet (fixed epithet) が用いられている場合、詩人は伝統的な人物像そのものに強烈に注意を向けており、generic epithet はその機能がやや弱く、particularized epithet は、その語の生きた意味や伝統的な epithet との競合関係による新鮮な特殊な効果をねらって用いられると考えることができる。いずれの場合も、物理的な延長とあるニュアンスの付加によってその epithet のつく人物の上に聴衆の視線を一瞬とどまらせ、注目させるという効果があるとみてよいだろう。

#### 注

- (1) Milman Parry, "L'Épithète traditionnelle dans Homère," Paris, 1928 ("The Traditional Epithet in Homer" (TE) in *The Making of Homeric Verse*, Oxford, 1971, pp.1-190).
- (2) Parry, TE p.118ff.
- (3) Parry, "Les Formules et la Métrique d' Homère," Paris, 1928 ("Homeric Formulae and Homeric Metre," *ibid.* p.220).
- (4) M. W. M. Pope, "The Parry-Lord Theory" in *Homer: Tradition und Neuerung*, Joachim Latacz, Hg., Darmstadt, 1979, pp.349-352.
- (5) formula と epithet に関する注意書き  
epithet には formula に用いられるものが非常に多いが、それがすべてではない。付加形容詞(「述語的」形容詞の反意語としての)や呼称で、たとえば

1 回限りしかあらわれないような、明らかに例外的、特別な用例もある（たとえば II. I 122, XVII 142, XXIII 570 など。I 122 については本稿の III を参照）。Parry は formula を視点の中心に置いて epithet を研究したが、noun-epithet formula としばしば組み合わせられる epithet を含まない formula (ex. tòn/tên d' ēmeifbet' épeita) ももちろんあるし、formula を構成しない epithet も（判別はしばしば困難であるが）かなりあるはずである。

本稿の研究は一応 formula とは切り離された、epithet の用例全体に関するもので、従って Parry の研究とは根本的に視点の異なるものである。なお各種の epithet の機能の相異についても本稿の III 参照のこと。

- (6) J. B. Hainsworth, “Good and Bad Formulae” in *Homer : Tradition and Invention*, B. C. Fenik, ed., Leiden, 1978, pp.47-48.

- (7) これに並行する工夫として、話しかけられている相手の名を強調する際の formula にも epithet が用いられる。

dīogenēs Lāertiādē, polymēchan' Odysseū など、その著しい例である。この他にも発言の終わった次の行に hōs éphato を入れ、続いて話しかけられた相手を強調する工夫もある。

ex. Hōs éphat', oud' apíthēse theā glaukōpis Athēnē (II. V 719)

またもちろん、発言したその人を、発言の終わったところで強調する例もある。

ex. Hōs ára phōnésas protérō áge díos Achilleús (II. IX 199)

- (8) さらに別の分類のできる一群もある。

(1) の 3) II. XXIII 776

(2) の 8) 140

9) 193

(3) a XVIII 234

(4) c 354

(5) XXIII 218

いずれも、弔いのための何らかの儀式的行為をしている場合とさえ言えるのである。これは、この二つの巻の主題上自然にそうなったと考えるべきかもしれない。しかし、たとえば、epithet の使用が儀式にふさわしい荘重さを加味するというような美意識がそこに働いていたと想像することもできるかもしれない。少なくとも「ホメロス風讃歌」の冒頭の神名が必ず epithet を伴い、しかもしばしばいくつも重ねて使用されること（特に VIII「アレース讃歌」参照）など、そうした背景を想定せしめる。epithet にはこの他にもまだまだ、我々の気づかない様々な微妙なニュアンスがあったかもしれない。

- (9) 本稿で扱うのは人物につく epithet だけであるが、普通名詞に epithet がつく場合、つかない場合の事例研究として、Vivante の oînos の epithet の研究が先ごろ発表された (Paolo Vivante, “The Syntax of Homer’s Epithets of Wine”, *GLOTTA LX*, 1982)。その観察によれば、oînos に epithet がつくのは対格における場合が最も多く、これは、注ぐ、献酒する、飲むなど、oînos の性質にとって“intrinsic”な動詞の目的語となる際に epithet がつくためだという。こうした現象が普通名詞全般にも見られることが確認されれば、epithet の役割とは、「ぶどう酒をまさにぶどう酒らしく表現すること」等々と要約できるようになるかもしれない。人名についても、いろいろと複雑な用法が発達してはいるが、本来的には「アキレウスをまさにアキレウスらしく表現する」ものであったことは確かだろう。
- (10) Parry, TE p.153ff.
- (11) Parry, TE p.176ff.
- (12) なお、既製の epithet を避けて  
 Tòn d’ ēmeībet’ épeita Thētis katà dākry chēousa (Il. XVIII 428 etc.)  
 とするような例も、人物像を鮮明に浮かび上がらせる技巧として印象深い。

### 参 考 文 献

- Allen, Thomas W. (ed.), *Homeri Ilias*, New York, 1979.
- Allen, Thomas W. (ed.), *Homeri Opera: Tomus III, IV (Odysseae I–XII, XIII–XXIV)*, Oxford, 1976, 1975.
- Allen, Thomas W. (ed.), *Homeri Opera: Tomus V (Hymni, Cyclus, Fragmenta, Margites, Batri, Vitae)*, Oxford, 1978.
- Ebeling, H. (ed.), *Lexicon Homericum*, Darmstadt, 1963.
- Fenik, Bernard C. (ed.), *Homer Tradition and Invention*, Leiden, 1978.
- Gehring, August, *Index Homericus*, New York, 1970.
- tr. 呉 茂一、高津春繁、『ホメーロス』(筑摩世界文学大系2)、東京、1971.
- Latacz, Joachim (Hg.), *Homer: Tradition und Neuerung*, Darmstadt, 1979.
- Monro, David B. & Allen, Thomas W. (ed.), *Homeri Opera, Tomus I, II (Iliadis I–XII, XIII–XXIV)*, Oxford, 1976.
- Parry, Milman, *The Making of Homeric Verse*, ed. by Adam Parry, Oxford, 1971.
- Vivante, Paolo, “The Syntax of Homer’s Epithets of Wine,” *GLOTTA LX*, 1982, 13–23.

\*

Vivante, Paolo, *The Epithets in Homer: A Study in Poetic Values*, Yale University Press, New Haven and London, 1982.